

## 2015年度特別研究期間 研究成果概要

文学部・教授・八木 康幸

研究課題：民俗文化の発見とその知識、情報の普及過程—男鹿のナマハゲを事例として—

研究期間：2015年4月1日～2016年3月31日

研究成果概要（2,000字程度）

秋田県男鹿半島の戦後の観光化の進展は、高度成長期の動きにほぼ重なる。「男鹿のナマハゲ」の商品化、あるいは「ふるさと資源化」（岩本 2007）は、多少の時間的なずれを生じさせながらも、おおむね観光化に伴う過程であった。男鹿半島の観光化は、1952年、秋田魁新報社による「県内観光地三十景」の選定投票で第一位に選ばれたこと、1953年に県立公園の第1号に指定されたこと、などを契機に本格化した。1960年代には、秋田国体開催にあわせて寒風山有料道路が開通し、その後、寒風山展望台の開業、入道崎八望台有料道路の開通、金ヶ崎有料道路の開通、県立男鹿水族館の開設、県道門前加茂線の一車線開通、大棧橋有料道路の開通など、観光インフラの整備が相次いだ。男鹿温泉郷や戸賀には次々とホテルが建設された。男鹿半島を訪れる観光客は、1955年の15万人から1965年には120万人へと増加し、1973年には302万人となってピークを迎えた。

この過程で、直接間接に観光化を意図するナマハゲの情報が、さまざまな媒体を通じて生産され拡散された。男鹿半島は、遊覧船で南磯から西海岸にかけての「怪石奇岩」を見物する「島めぐり」、入道崎や八望台の景観、本山・真山にまつわる神社仏閣、寒風山頂からの四周の眺望、その対象でもある八郎瀉の湖上風景、などの豊かな観光資源を有した。奇習ナマハゲの由来譚やその図像には、八郎太郎の伝説、丸木舟、海女、男たちの出稼ぎと女消防隊の逸話などとともに、男鹿半島の魅力を引き立てる役割が与えられた。

秋田県や男鹿市による刊行物、旅行ガイドブックや旅行専門誌、新聞記事、絵葉書、バス会社や旅館・ホテルの案内リーフレットなどの分析により、1950年代からナマハゲの記事や解説が増加して、北浦相川や船川港上金川のナマハゲ写真が盛んに用いられたことがわかる。1950年代後半には、男鹿市や男鹿市観光協会の要請に応じて、デパートの物産展に動員されるナマハゲや、取材を受けて雑誌のグラビア頁を飾るナマハゲが現れた。

1959年、門前長楽寺に観光用のナマハゲ像が製作・展示されたことを皮切りに、1960年には「ナマハゲ踊り」が考案され、1964年には、湯本星辻神社（のち真山神社）を舞台に「ナマハゲ柴灯祭」が創出された。集落的な伝承基盤をもつ小正月行事（すでに大晦日に移行）を脱文脈化し、どの集落にも属さない「男鹿のナマハゲ」へと再文脈化することによって、ナマハゲは操作可能なふるさと資源としての性格を強めた。宿泊客はホテルのナマハゲ踊りに拍手を送り、宴会場に闖入するナマハゲとのスナップ写真を楽しんだ。定期観光バスが立ち寄る寒風山、八望台、入道崎、戸賀湾でも、ナマハゲを囲む団体写真の撮影が行われた。これらの観光ポイントでは、自家製の面と装束を着けたナマハゲが、観光客に有料で写真を撮らせるビジネスも考案された。

このような「男鹿のナマハゲ」の前景化を許した「観光のまなざし」は、各種のメディアを通じて「はてしなく再生産し再把握をくりかえす」（アーリ 1995）ものではあるが、1950年代

の、戦後における男鹿半島観光の初期ともいえる時期においては、まなぎしの形成には観光以外のチャンネルが大きく作用していた。

ひとつは映画やニュース映画のような映像メディアを通じたナマハゲ図像の普及である。とくに、ナマハゲを登場させて評判を呼んだ日活映画『女中ッ子』（由起しげ子原作・田坂具隆監督・左幸子主演、1955年）と、ナマハゲをモチーフにした東映教育映画『なまはげ』（柴田北彦原作・黒川義博監督・栗津祐教主演、1960年）が重要である。後者の『なまはげ』は、1952年に高校演劇的一幕劇として柴田北彦により創作・指導されたもので、各地の高等学校の演劇部を中心として、映画化以前に何度も舞台上演された。

印刷メディアでは、岩波写真文庫『男鹿半島』（1955年）、岡本太郎「日本芸術風土記」（『藝術新潮』1957年）、宮本常一「ナマハゲの出る村」（『風土記日本』1958年）などがナマハゲの解説と写真を掲載して、その知識と図像を広める役割を果たした。他の啓蒙書・教養書など一般図書にもナマハゲはしばしば登場した。

1950年代、ナマハゲに関して、図像を含む紹介記事をもっとも頻繁に掲載したのは、小学生向けの学習雑誌や学習年鑑、社会科・国語科などの副読本の類であった。とりわけ学年別学習雑誌の新年号は、雪国の正月行事の一コマとして、盛んにカマクラやナマハゲの行事を紹介し、イラストや写真を掲載した。たとえば、『小学一年生』から『小学六年生』にいたる小学館の学年別学習雑誌から、1949年から1970年の22年間の130冊あまりの新年号を分析したところ、1951年から1960年の間に記事が集中（19冊、後半の10年では4冊）することが判明した。直販制をとった学習研究社『一年の学習』等もほぼ同じ傾向を見せた。

正月に関する記事には、時に橋浦泰雄、大藤時彦、和歌森太郎、瀬川清子などの民俗学者が解説を寄せている。柳田国男・和歌森太郎『社会科教育法』（実業之日本社、1953年）が、世間教育として望ましい話題に、小学校三年では農山漁村や、地域的相違による生活・文化の相違を挙げているように、この時代における初等教育と民俗学の関係が背後にある事実にも注目する必要がある。